

広葉樹のものづくりと 森づくりに取り組む背景

ものづくり研究会

山口 博史

私は木の家具やクラフトの職人としての経験やデザインを通じてアカデミーの教育にかかわっている。私の生涯のテーマでもある事例を紹介したい。

ひとつは、広葉樹天然二次林の間伐や択伐とその材を使っているものづくりである。2004年から、持続的な利用を目指して二次林の私有林を貸していただき、持続的な伐採と利用とは何かを考え、かなり小規模で恐縮だが、森を調査し、残すべき樹を選び、材を伐り出し、ものづくりにつなげ、展示会などで一般の消費者の反応を得てきた。

もうひとつは、その背景となる状況把握のため、広葉樹関係の林業、流通、製材関係者から聞き取りや見学による仕事の把握を行ってきた。私も含めた木工関係者は市場までくらの流通状況は詳しくても、素材生産の状況はまったく知らないからである。

山側の背景を見ると、岐阜は広葉樹の大きな産地のひとつであった歴史から、いまでもほかの産地に比べ広葉樹に関する製材、乾燥の技術、人がまだ残っていて、ポテンシャルはあるといえる。しかし、いまだに繰り返す皆伐の影響で資源が若年化し、材の供給力が低下、仕事が減り人材も少なくなった。また、材を出し使うだけで、更新などの育林につながる結果はなく、自然任せの取奪に計画性もなく、「持続性」という結果は残っていない。そんな過去に、私も含めてすべての業界、消費者が関わっていたことに問題を感じている。

使う側では、家具メーカーなどの広葉樹利用側は大正期に豊富な資源を求めて飛騨に根ざし「飛騨の匠」として地位を築いたものの、1980年代頃から地元材の供給力の低下が顕著となって外材利用に拍車がかかり、国産材使用割合は低下した。なかでも地元の材料を利用する比率は極端に落ち込み、地元の山の仕事へのつながりは薄い。一方、ここ数年で材の背景を問う世論が家具業界にも波及してきて、持続性への関心はかなり高い。



▲道の駅「美濃にわか茶屋」の家具アカデミーが設計し地元材の中に間伐材も利用した

一方で、ここ数年で材の背景を問う世論が家具業界にも波及してきて、持続性への関心はかなり高い。

広葉樹流通では、岐阜、各務原を中心に全国的に知られた市場が存在するが、岐阜の山とのつながりという意味合いが薄い。広葉樹地元材を多く扱う高山の市場

は、「ぎふ証明材」制度を利用してトレーサビリティを売りにできる可能性、多様な樹種の丸太を選択的に購入できるなどのメリットはあるが、出材の減少と買い手の減少の悪循環に陥っていて危機的である。

従来の視点で背景を見ると、悪い状況ばかり感じる。用材資源の復活の見込みはここ最低50年はないだろう。その間の素材生産や製材・乾燥の中間的な技術的な伝承、市場などの仕組みの崩壊が心配である。国産材使用の世論の高まりに乗って少しでも地元広葉樹を使いながらその仕事のことを考えていかないといけない。県産の広葉樹材を使う意味合いは、「人」「技術」にあると思い、継続して使っていきたい。

しかし、すでに少ない県内の資源状況の中で単に使うというだけでは片目で見ているようなものだ。もう一方で、同時に持続性を見ていく片目を開ける必要がある。

持続性を考え、それを付加価値として育てる取り組みを実用研究で始めるのは今が好機であり、それには、視点に価値転換が必要だ。森の100年後を育てる目、将来のために伐らない木を選ぶ目、その材に付き合おうという意識、少々の材の欠点を許すものづくり。これらはいいい材でいい木のモノを作ろうという、いわば当たり前なものづくりの意識では難しい。しかし、そういったストーリーを待つ客層が、今までできなかったことを許し可能にする時代が来ていると感じ、岐阜はその可能性に満ちている。その可能性の芽を集め、岐阜の独自性として育てたい。

今年、私が広葉樹二次林で取り組んでいることは、研究者と共同で森林生態に基づいた科学的な調査を取り入れること、作り手やマーケットの小さな賛同をまず集めること、それらをわかりやすく伝えていく専門家との協働である。正直、まだまだ問題が多い段階で、多くの関心のある人の意見を願う、拙文で申し訳ないが本稿を終わりたい。



▲学生作品「彩」



▲山口作品「あぐら椅子」